赤ちゃんの四季（41）平成23年春

高齢出産には高いリスクが伴う

平成２年には３５歳以上の母親から生まれた児は1１万人弱でしたが、平成２０年には２３万人近くまで達し、４０歳以上の母親からは、1.3万人から2.8万人へと急増しています。一方、最適出産年齢とされる25〜29歳での出生数は、55万人から32万人へと２０万人以上も減少しているのです。今の日本では、出生児の半数以上、60％近くが、30歳以上の母親から生まれています。

このような高齢出産化の背景にあるのは、女性のキャリアー志向が妊娠に優先していること、不妊治療の進歩に負うところが大きいと考えられます。体外受精を世界で初めて報告したロバート・エドワード博士がノーベル生理学・医学賞を受賞されましたが、この体外受精のお蔭で５０人に１人の割合で、今の日本では出生しています。

この体外受精による妊娠率は20代では30％ですが、40歳になると10％以下になると言われています。しかも、40代の不妊症の頻度は64％であり、不妊治療が進歩したとは言え、40歳代での妊娠が極めて困難なことは余り知られておらず、不妊治療をすれば、誰でも簡単に妊娠できると勘違いしている女性が多いようです。たとえ運良く妊娠しても、30歳を過ぎると年齢とともに、生まれてくる児の死亡率や、染色体異常などの先天異常の発生頻度が高くなります。

実は、永らく子宝に恵まれなかった41歳になるうちの末娘が、昨年、綱渡りのような妊娠期間を経て、早産ですが何とか出産にこぎ着け、無事女の子を授かりました。彼女は、高齢出産に伴う典型的な合併症、大きな子宮筋腫を抱え、出血と戦いながら、また後半期には妊娠高血圧症と、妊娠期間の半分近くを入院するという、悲壮な毎日でした。娘は決して知識レベルの低い子とは思いませんが、これ程までに高齢出産が大変とは考えていなかったようで、我が身を賭しての出産経験で、はじめてそのリスクの大きさを思い知ったようです。